

たけ
猛き人の悲劇

源義経④

一龍齋貞花

講談師

「弟の義経が、わしに反逆しない保証があろう。気を許してはならん」源氏は代々親子兄弟一門がおのおのを疑って戦うという歴史があります。頼朝は義経の力を恐れていた。義経と仲違いをした側近梶原景時の讒言を混じえた報告で疑い深い頼朝の気持ちは決った。腹を立てたのは無断で位をもらったことだけでなく、壇の浦で三種の神器のうち剣を手に入れそこなったことも大きな原因。三種の神器があれば息のかかった天皇を任命することが出来るからです。

義経は、平宗盛以下の捕虜を引き連れ鎌倉の入り口腰越に着いたが、頼朝は義経の鎌倉入りを許しません。

しかし義経は、兄にそむく気はまるでなく、三島の黄瀬川で初めて頼朝に会った時のことから、壇の浦までの自分の苦労をくわしく記し、心の潔白を血を吐くような思いで綴りました。後世の人が涙

無しには読まれぬ涙の腰越状です。大江広元にとりなしを頼んだものですが、この手紙をもってしても頼朝の心を動かすこと出来ず、すごすごと都へ引き返した義経は、宗盛以下の捕虜を処刑。

「京へ帰ったと申すか、よし義経に与えた所領20カ所は没収し、この上は義経を亡き者にせねばならん」

かくして追われる身となった義経は、頼朝のさし向けた土佐坊昌俊を、静の機転で討ち果したものの、かくなる上はと、義経を慕う二百の兵を率いて大物浦から九州へ渡ろうとしたが、折からの暴風に何隻もの船が転覆し将兵は行方不明となり、ようよう住吉の浦に打ち寄せられ武蔵坊弁慶、佐藤忠信、愛妾静など義経に従う者わずか12名、雪深い吉野へと。それにしても平家を亡ぼし連勝を続けた義経が、落人の身になろうとは誰に想像出来たでしょう。かくまってくれた山の中の小さな寺にも永くおられず、静のため「都へ帰れ」と別れを告げる義経。

しかし静は、従っていた下僕たちに逃げられ雪の中をさまよった揚句、吉野山の法師に捕えられ、義経詮議のため鎌倉へと送られたのでございます。

鶴ヶ丘に舞う静御前

文治2年4月8日、鎌倉の鶴ヶ丘八幡宮は祭礼で賑わっておりました。義経の美しき愛妾静御前が舞うというので、その賑やかさはかつてないものでした。

立て烏帽子を頂き、白き水干緋の袴、黄金造りの太刀をはきし姿に、思わず上るとよめきの声、その姿は評判通りに美しく気高くさえありました。

「静を、ご舎弟の側室とは扱はれず、ただの白拍子として見ようとお心か」

今にもあふれん涙を抑え、

「舞えとの仰せ思いもよらぬこと、このところ身体もすぐれず、舞の所作なども忘れ果てておりまする、お許しを」

そんな願いも政子の望みとあれば断り切れるものではありません。

「さまでの仰せ、ふつつかな舞ながら一曲仕りましょう。とは申せ今の私は白拍子ではありませぬ。なんの人中に立てわが夫義経殿の恥を誰れの興に供えましょうぞ、ただ八幡の照覧に供え奉る」

へ吉野山 峰の白雪踏み分けて 入りにし人のあとぞ恋しき

吉野の雪にもまごう白き水干の袖は、鎌倉武士の眼にも熱いものを覚えさせ、そっと涙を。

“殿は今何処に、そしてお身の上は、今の私は殿と離れていてもこのお腹の中には愛しき人の赤子がいる。なれど生れてきた時、この子は果してどうなることであらうか” 今は何処か知らねども愛しき人を忍んで別離に生き抜かんとする静、涙を抑え今を盛りと咲きほこる花の下、舞い続ける静は一声張り上げて

へ賤や賤 賤のおだまき繰り返し、昔を今になすよしもがな。

「おのれぬけぬけと義経のことを、その女子も同罪じゃ、叩き斬れ」

「殿、静は子を宿しております。今の静の心と、蛭が小島におられた殿のことを想い慕うておりました私の心と同じです。何卒思い止まられますように」

後年鉄の女といわれた政子も女でした。政子の言葉に思い止まった頼朝ではありましたが、間もなく静が義経の子を産むや男の子であったため、頼朝はその子を由比ヶ浜から海へと流させ、そして静は許されます。生れたのが女の子であったならば助ったかもしれぬのに、この上もなく愛した人の忘れ形見を生まれるとすぐにもぎ取られ、傷ついた麗しの舞姫はどこを流浪したことか。さまざまな伝説が残され、茨城の栗橋駅近くに、文治5年9月15日亡と記された静の墓が建てられています。義経を北へ追って行く道すがらここで命を終えたというのです。義経の哀しい物語に、静御前の話がなかったならばどれほど華が失なわれたことでしょうか。

静の舞いからわずか半月ほど後、都を離れた物寂しい山里の庵室寂光院へ、後白河法皇がお忍びの大原御幸。出家した建礼門院徳子との、平家無常の世界の語らいは次号に申し上げます。ポポン